



## 會員通信

### 雌阿寒岳にて

野田 四郎

上足寄で汽車からおりると、五月のはじめとは思えないほど暖い日であった。札幌近郊の山も汽車の窓から眺めた目高の山々もまだ真白に輝いていたのに、阿寒の山は黒々としていた。あわよくば、ことし最後のスキーをと思ってスキーをかついできたのがうらめしい。砂ぼこりを立てながら走る、自動車の窓から見える雌阿寒岳も阿寒富士も、わずかに雪渓を残しているだけで、中央高地ならさしずめ八月ころのたたくまいであろうか。自然のままに流れる川にそってはえるネコヤナギの花が美しい。

附近の林のみごとなことは。一面に生い茂ったアカエゾマツの純林の暗い林床には、ほとんど下生えはなく、アカエゾの幼樹がみられるだけで、生態学の教科書どおりの天然更新がおこなわれている。亜寒帯性の、典型的な極相林であるオンネトウはまだ凍っていた。数センチにもびた細長い柱状の氷の結晶が水面をおおい、眺める角度によつて濃淡さまざまなエメラルドグリーンに輝く。そして湖底から湧水でもあるのであろう、ところどころ氷がとけて顔をのぞかせている水は、どうしてこんなに不思議な青色をたたえているのか。

わずかに雪の残った雪渓をスキーで登ると、眺めは雄大であった。頂上まで一本の広葉樹も混じえずにびっしりと生い茂ったフツン岳の針葉樹、雌阿寒岳、阿寒富士の裾野から西の方へ広がる広大な樹林。この林もよくみれば広葉樹が少しまざり、残念なことに野火のあとではないかと思われるところがあるけれども、石狩川上流の大森林が台風のため昔の面影をとどめなくなった現在、人の手を入れないようにしてたいせつに保存する必要がある。

観光ということばを本来の意味で用いるならば、観光地には極力人為的な施設、その他を排し、あるがままの自然を見ることのできるようにしなければならぬ。多くの人達がこのすぐれた景観に接することは望ましいし、そのために必要な最小限の設備をととのえなければならぬが、そのことと娯楽施設を設けることは、まったくべつのことである。雌阿寒岳の帰途、阿寒湖畔で雑然と建ち並んだ多くの建物や、スキー場のために切り倒された林をみてそのことを痛切に感じた。(札幌旭丘高校教諭)

### 自然と子供心

吹上 芳雄

「お父さん、草の名前教えてね」「うーん、急になんだい」「夏休みの自由研究なの」小学四年の坊主が真剣にいい出したので、ビックリした。いづれ先生か女房の指示だろうと聞いてみたが、どうやら自分からいいたしたものらしい。子供の勉強の監督はもっぱら女房と決めている私も、このときばかりはアドバイスしてやろうという気持ちにもなった。

札幌では、恵まれた環境といえる真駒内に住んで八年になる。私自身は山歩きが仕事なのだが、最近はとみに疎遠気味、そのためか、休日などは近所の子供達とも一緒に、いとも簡単に旧ゴルフ場内の散歩をかさねて来たものだ。とくに春は、エゾエン

ゴサク、カタクリの花の一斉に咲く群落を眺めては冬からの開放感を満喫し、夏から秋にはキイチゴ類の実を口にしたり、葉だぞとゲンノシヨウコをつみとったりなどしていたことが、坊主にとつて気楽に草を自由研究にと結びつけたのかも知れない。まあそれでもいいんだと合点し、協力を約束しておいた。一日一つずつ自宅の周りの草をとりあげ、写生を中心に、自分の観察などを記したものが、オヤジの期待に反してまったくの大きっぱ、しかも、へたくそでみられたものではない。しかし、その中の解説めいたものだけは、およそ研究とはいえないけれども、オヤバカもつけ足して傑作だ。

「トンボがよくとまる草はこの草だ(エゾギンギンのこと)」、「四葉のクローバーは、なかなか見つからない……」、「コケに宇宙人みたいな形のものがついている(ゼニゴケの合掌株)」等々。そして最後には、「自分の家の周りがある草がほかのところにあるととても楽しい」、「お父さんにも解らないのがあって、とうとう解らぬままのものもある」と不満で結んでいるあたり、ホホエミさを感じた。

このごろは、オリンピック関連の建設で様相も変わっては来たけれど、まだこの附近の林の中を子供達と一緒に歩きまわって

## 回想の北海道

### 住谷省三

北海道生活三年、それから帰り来て一年半になります。北海道のことが、テレビや新聞のニュースにでるたびごとに、あああの地、あの山野がと、回想に家族共々ひたるばかりです。

札幌(南一九・西九)に住み、広大な都市美を、藻岩山頂から眺めたこといく十度か、折あるごとに郊外各地を散歩し、道内全域に足を伸ばし、大雪、暑寒別、阿寒、芦別、日高、ニセコ、そして札幌郊外の山々を訪れどん欲に、道内各地の自然に接し来たって、いまさらのごとく、北海道に住む人々の幸せをうらやましく思います。

春、深い雪の上に紺碧の空が現われ、雪しろが日々広がり、露の蕾が、待っていましたとばかりに、サッと顔を出しはじめると、私にも、それから一年の山野跋涉のスケジュールがきまります。露の蕾からはじまって、タラの芽、露、わらび、アイヌネギ、石狩浜の浜ボーフウ、そして広島村のあたりの根曲り竹の筍狩りと、私の休日課は多忙をきわめました。

夏は、山への旅が待っていました。いず

いる。一度は偶然一匹のリス(シマネズミ)に出合ったことがある。子供達のニッコリといおうか、キョトンといおうか、なんともいえぬ表情が忘れられない。そして「あのリス、雨のときはどうしているんだらう」、「食べものはなんだらう」、「……」、子供同志の交わす言葉が、また楽しそう

だ。そして際限なくつづくので、子供達の世界に静かにまかせておいたこともある。

自然の保護、保存についてはまたの機会にまわすとしても、真駒内の僅かな林でさえも、自然の実感にひたることができる。

そして子供のころからきわめて自然に味わえることは、貴重なことだと思っている。

こんな中で育った子供達が多ければ多いほど、そしてこんな子供心がそのまま育ってくれば、これから先ももっと住みよい自然環境の保持もできるだろう。私はせつかく身近にあるこの恵まれた環境を大事にして子供達とまた歩きまわろうと思っている。

(道・林務部治山課)

## 探鳥会

### 上条一昭

この春、われわれの職場の中に「探鳥会」のグループが誕生した。同じ職場にい

ながら、鳥に興味をもっている人がいるなどとは、これまで思ってもみなかったが、一人がいいだすと、たちまち数人が集まった。これに奥さんたちも加わって、しごくなごやかなグループができあがった。

試験場の裏手の圃場とそれにつづく山で一カ月に一回の割合で探鳥会を開いてきたが、ここには大きな木がないため、草原性の鳥が主で、種類数は限られている。たまにはどこか、鳥のたくさんいるところへ行ってみようということになったが、いざ探してみると、家族づれで手軽に往復できるような場所がみあたらない。鳥の多い森林へいくとなると、丸一日をつぶすことになる。

最近、人の住む場所と他の生物の住む場所の隔離が、急速に行なわれている。鳥は巣をつくる木や、餌をとる場所をうばわれてだんだん人の目につかないところへ追いやられている。また、都市化や農薬の影響で虫が少なくなったため、夏休みに昆虫採集の宿題を出しても、何もとれない子供がふえているという。

野幌の森林公園や、札幌の藻岩山、円山の原始林とまではゆかなくとも、自分たちの住んでいるすぐまわりに、生物に親しめるような場所がもっとできないものだろうか。

(道立林業試験場)

れの小旅も、負けず劣らずの楽しさでした。が、その中でも礼文島周遊と利尻登山は、一番最初にとび出してくる思い出でした。

それは、破壊されない自然が、まったくそのままにあったためでしょうか。高山植物群落が海岸からある礼文、壮大な海洋の中にそそり立つ利尻岳の、神秘的な姿、山麓の森林帯に鳴く野鳥の大合奏は、ここを訪れた人でなければ知ることはできないでしょう。秋、私には、もっとも楽しい季節でした。札幌郊外でいくらでも手に入れることのできたきのこ「らくよう」、果実種の原料「こくわ」と「またたび」そしてまた山ブドウの群落は、私の心を躍らせてくれるのです。

熊が出るそうだから気をつけてと、家族の注意もうわの空、熊笹に足をとられ灌木を押し分け、樹木によじ登って、うれたこくわの、どっしりとした手応え、あの感触、日本の果実中、最高といわれるその味に、私は魅せられ通しました。(これでつくったコクワ酒は、果実酒中、最高級品で私はいまも珍品として保存中)

その自然は、得難い所産ですから、為政者はもちろん、全道民一九となって、守ってほしいと思います。石狩川の流れが、いつの日か、清らかなものにかえる日を願って。

(埼玉県立大宮勤労青少年ホーム館長)

## 高 沢 光 雄

雨竜沼の自然を保護すべく天然記念物に指定されたのは昭和三十九年十月で、その年の八月にはじめて雨竜沼を訪れて、その原始的な風光美に感激した。その感激が忘れ得ず、一昨年ふたたびそこを訪れたが、あまりの変貌ぶりに驚かされた。

まず山小屋まで車ではいれる気安さもあってか、滝や池塘に紙屑や空缶類が目につき、踏跡も奔放についている。それにも増して嫌悪な思いをしたのは、池塘の道沿いに針金の柵が施されていたことである。広大な展望も景観をそこね、原始性すらなく、人為的な公園でしかない。池塘の迷いやすい箇所だけに指導標をつけるとか、町役場などで入林許可証を渡す際に注意事項を書いたパンフレットを配り、徹底できないものだろうか。本誌第二号に示されているごとく、高所から全景を見おろす山手に登路を設けることに賛成なのだが、南暑寒別岳を越え、暑寒別岳から増毛側に下った際は、地元・山岳団体が協力しているせいとか、空缶類はあまり見かけなかった。

最近手にした道林務部の機関誌「林」V第

二〇九号に、興味ある一文があった。北海道では珍しいとされているエーデルワイスは礼文島や太平山にあるが、「まぼろしの花」として探し求め、芦別岳の近くの難山で発見されたと報告されている。そのうちに花に心ある者がおしかけて、たちまち絶滅してしまうのを憂い、いつそのこと、皆で腐葉土を持ち上げて栽培し、全山、エーデルワイスで飾ろうと、今村朋信氏は提案している。原始的な自然美は失うかも知れないが、自然を愛護するにはまたとない策だと私は思う。(丸善株式会社札幌支店)

## 高 橋 諒

## ペンケヌシ岳のコマクサ

五万分の一の地形図「千栄」を拡げると、沙流川の支流ペンケヌシ川とペンケヌシ川の源に標高一七五〇、一mの無名峰がある。これが、一九五一年に、館脇操博士によつて、日高山脈唯一のコマクサの産地として報告されたペンケヌシ岳である。

私も、日高地方の植物相を調査している関係上、一度、コマクサを確認する必要がある。昨夏(一九六八・八)、地元・日高町山岳会の佐藤勉氏の協力を得て登山した。このとき、シラタマノキ、タカネクロス

ゲ、ミヤマサワアザミ、タカネスギカズラなどの日高初産の高山植物も見したが、目的のコマクサは、この山の西側斜面の裸地や南側鞍部の砂礫地でみられた。その数は、盗採されるようになれば、またたく間に採りつくされてしまうであろうほどのわずかなものであった。

幸か不幸か、ペンケヌシ岳への登山は、チシマザサのブッシュや尾根を占めるハイマツ群落によつて阻まれていたので、コマクサが盗採されることは、まずなからうとそのとき判断したのだが、ことし、この山につながるペンケヌシ川の上流の沢まで林道がのびて、日帰り登山も可能になったと聞いた。しかも、困ったことはコマクサの盗採もはじまっているとのことであった。

(類似中学校教諭)

## 海岸緑化におもうこと

## 伊 藤 重 右 工 門

自然の荒ハイとか保護という場合に、じつに昔語りが多くかされる。私の保つている海岸林についても同じように、たとえば、海辺までみはるかす樹海であった……という具合である。去つた百年を失なわれ

生きた父祖の百年といつたりする。

昨年、開発と保全とのバランスが話題にされる。海岸林を例にとると、この場合、失なわれた緑は開発のための礎石であったといえても、バランスをとるための保全としての海岸林づくりは、いわゆる海岸緑化という形而上の問題もふくんでいて、なかなかの難事であるといえよう。かつてあった海岸林は、ずっと内陸までつづいていてその舞台の広さを自慢していたらうし、きつと長い年月をへながら自然の淘汰を越えて、仲間との競争に勝つただけが天然林として存在していたと想像する。

海岸緑化にひとつの問題がある。土地取得上の理由で、海岸林づくりが限られた林帯の中で余儀なくされるといふことで、失なわれた緑の回復をねがうからには、じゅうぶんな幅員がまず確保されなければ、こゝろなんである。

さらに、単純に緑化ということが、真の意味で自然と調和のとれた美になりうるかは疑問である。北海道の魅力は、原野の、海岸のもつ荒涼たる美しさにもあるのだから……。このようなことを考えるとき、海岸林・海岸緑化は、治山思想の分野においてだけでなく、広く自然保護の立場から検討する時機にきているとおもう。

(道立林業試験場)